栄久庵憲司先生が逝く

TEM研究所　真島俊一

工業デザイン界の巨匠、栄久庵憲司先生が、草創期から日本生活学会に参加され、当学会の活動を支え続けていたことを知る人は少ないでしょう。

43年前の昭和47年（1972）9月に発起人設立総会があり、ここに栄久庵先生は出席しています。その後、会長は今和次郎先生、理事長を川添登先生とした学会がスタートし、21名の理事に名を連ね活動していますが、高名な研究者が揃っていた中で工業デザイナーの栄久庵先生の参加は異色でした。発足した本学会は京都、名古屋、岡山、仙台、福岡など、毎年各地で公開研究会やシンポジュウムを行い、会員数も増加させていくのです。この参加者の公募は新聞等での告知もありましたが、加えて事業家でもあった栄久庵先生が、現地の企業などに参加を呼びかけたため会場は満席状況だったと聞いています。

このころ、すでに栄久庵先生はGKデザイングループの会長として、百数十人のデザイナーを指揮して日本の企業に向けての多忙なデザイン作業を行っていたのです。この中で有名なヒット商品も生まれています。例えばキッコーマン醤油の卓上醤油さしです。これは昭和36年（1961）に発売が始まったもので、頭に赤い差し口があるスリムで美しい形をしたガラス瓶です。半世紀のちの現在までの販売総数は3億本余ですので、日本の各家庭に1～2本は存在していることになり、このシェアー内訳をみると日本国内30%、米国55%、その他世界中に輸出されている状況となるのです。

写真提供　GK 藤本清春さん

発売当時、中学生だった私の家の食卓にもこの小瓶が並び、他の食器にはない鮮やかな印象をもったのです。つまり栄久庵先生は、工業製品の生活者への普及力を身をもって知っていた人だったのです。

私事になりますが、私は美大の学生時代に栄久庵先生の著作「道具考」〔鹿島出版会、昭和44年刊〕を読み、これからの建築や住まいには近代的な道具の位置付けが重要になると痛感したものです。以来こうした栄久庵先生の生活文化への強いまなざしを学び、他の多くの学生と同じようにですが、栄久庵先生の活動に参加するように

なっていくのです。

栄久庵先生の日本生活学会への参加は盟友、川添登先生の口添えもあったのでしょうが、後に伺った本音としては、生活用品をデザインする人としての「生活学、道具学」形成への渇望があったからでしょう。

昭和63年（1988）、今和次郎生誕百年を記念し開催した「考現学は今」の展覧会と「豊かな貧乏」のシンポジュウムには沢山の人が参加し、人の輪も広がる大盛況のイベントでした。大会委員長は栄久庵先生、副委員長は弱輩者の私でした。プロジェクト名や内容を定めるに当り、川添先生の研究室に日本生活学会の若者が集まり、展覧会名を「考現学は今」とすることを提案したのは相澤韶男さんでした。ネーミングは今先生の「今」と、現代の「今」を兼ねての提言であり、相澤さんは調査研究していた大内の町並の伝統美を、佐渡宿根木で道具調査をしていた私は、民具を博物館から借り出し、民具から近代の道具への展開を展示で示しました。

日本生活学会の展示は、共同調査をしていた巣鴨とげぬき地蔵通りの「おばあちゃんの原宿」で、これらをA展「考現学から生活学へ」としました。B展は「今和次郎の世界」とし、美校出身の今先生のデザインした食器、家具を、さらに考現学調査の始まりとなる各種スケッチ類を揃えたのです。

この展示設計はGKの皆さんが行ったもので、企画と内容の充実は山口昌伴さんが、スポンサー探しと運営事務局を担当したのは曽根真佐子さんであり、現社長の山田晃三さんも展示作業に参加しています。スポンサー探しの途中、曽根さんは今先生の大正モダンガールの調査を思い出し、銀座のガスホールへ飛び込み、突然、展示ホールの借用を願い出たところ、館長さんは喜んで無料貸出を申し出てくれたというエピソードも加わりました。いずれの活動も栄久庵先生あっての活動から生まれたものでした。

この活動の輪の広がりの中で、今先生の資料については遠藤健三先生や内田青蔵さんが力を添えてくれましたし、活動の進展と共に人が集まり輪ができ、学会を巡る人々の知恵が結集する状況となったのです。有楽町の朝日ホールで行ったシンポジュウムは、その頃の日本の生活状況を「豊かな貧乏」と捉え、関連三学会が登壇しました。路上観察学会、現代風俗研究会、日本生活学会です。日本生活学会は、迎え来る高齢化社会を視点におき、日本の「おばあちゃんの原宿」現象を報告したのです。

満席立見となったのは朝日新聞社の広報力もあったのでしょうが、基調講演は鶴見俊輪、パネラーは一番ヶ瀬康子、多田道太郎、藤森照信、井上章一といった各先生方の高い力量が反映したものだったからでしょう。

閉会のごあいさつで栄久庵先生は、原爆の洗礼を受けた広島出身の僧職資格を持つ者として、あるいは戦後社会を支えたデザイナーとして、次のように語っています。

「豊かな貧乏」この本当の豊かさを問う一連の催しが、昭和から平成への転機に行われたことは、「今」考現学が大正から昭和への転換期に創始されたことに鑑みて、まことに時を得たものでした。(戦後,日本の生活文化が）大きな一時代を超えたいま、「今」考現学、そして「生活学」への次元をさらに高め、より広く鋭いまなざしをもった生きた学問を（若者たちと）構築していくことこそ、今先生への最良の供養となりましょう。

平成になり27年を過ぎた今、「豊かな貧乏」は重症化しつつありますが、そのさなか栄久庵憲司先生は平成27年2月8日逝去されました。享年85才でした。

思えば栄久庵先生を中心とした活動によって日本生活学会は、人材の輪や知的活動の幅も広げることができたのです。以後、この事業の参加者たちが学会誌などへ盛んに論文を書き始め、学会賞受賞者としても登場してきます。

こうした各種事業の展開が学会の知的活動の泉源となり、人を育てることになる重要な活動となり流れを広げた川のように、さらなる研究事業の展開ができることになるとは、あの頃の学会員たちは考えすらしませんでした。日本生活学会は、このことを深く感謝すると共に、生活学のさらなる継承力の増大を誓い、お別れの言葉といたします。